

農村三世代家族の親族関係

常葉学園大 ○佐藤宏子

お茶女大家政 佐野志津子 袖井孝子

目的：伝統的家族規範の解体や産業化・都市化は、職業的移動、階層移動、地理的移動などを生じ、各単位家族の自立度を高め、親族関係の規制力を弱めている。本研究では農村家族において、伝統的親族関係がどのように変化しているかを、世代、居住形態、家族構成などの視点から明らかにする。

方法：1986年7月の静岡県志太郡岡部町三世代同居家族調査で得られた有効票129世帯の中から20世帯抽出し、G₁母とG₂妻の計40ケースを対象者として1987年8月に訪問面接調査を実施し、事例研究を行った。この他、分析には文献調査、町内有識者からの聞き取り調査が用いられている。

対象者の基本属性：平均年齢はG₁68.8才、G₂40.2才。家族構成は完全三世代家族と父欠損三世代家族が各10世帯。居住形態は夫方居住15世帯、妻方居住5世帯。農経営形態は専業農家9世帯、兼業農家11世帯。岡部町出身者はG₁7人、G₂12人であり、周辺市出身者を入れるとほぼ100%となる。

結果：①G₁・G₂ともに「きょうだいとその子」「父母のきょうだいとその子・孫」との交流が最も多い。②夫方居住では親族関係は夫方傾斜、妻方居住では妻方傾斜を示す。③G₁の親族関係は「義理」に基づく義務的体系の特徴を持つが、G₂では「インフォーマルなつきあい」と考えられ、個人の選択的体系としての性格を強めている。④父欠損三世代家族のG₁では親族関係は極端な妻方傾斜を示す。⑤専業農家が夫方傾斜を示すのにたいして、兼業農家は双系的親族関係に近ずきつつある。⑥里帰り・産後の休養・産育行事のいずれについても、G₁に比べてG₂において、実家の援助やかかわり方、存在が大きい。⑦結婚式・葬式のいずれにも「組」が重要な役割を果たし、密接に関与している。